



ほそかわ たみこ●ブラジル音楽のパワーの源を探りに1年の留学のつもりで渡伯。研究課題は謎が深まるばかりで、帰れないままサンパウロに居ついて20年。編集長を務める「フンバ」はサンパウロにある日本語によるブラジル情報誌

ほそかわ たみこ
細川多美子
「フンバ」編集長

「なんでもあり」の積極性こそがブラジル文化の面白さだ

日系をテーマにした2008年のサンパウロのカーニバル。どこにもない「夢の日本」が展開した

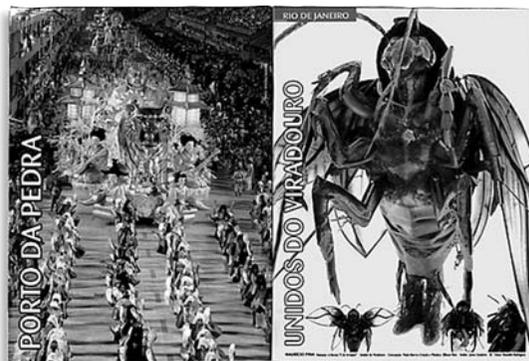
写真提供：筆者（29、30ページも）



なんだこりゃあ、と叫んだら負けだ。敵はあの手この手で意表を ついてくる。そんな変、と心のシャッターを下ろす前に深呼吸をして、品定めする余裕を持つ。という訓練を積んだおかげで、眉をしかめる前に、思わず笑ってしまったり、ほうと感心したり、楽しい思いができるようになった。

相手は奇天烈な建物、難解な音楽、意図の読めない映画、どこが芸術なのか声をひそめて聞きたい絵画。その斬新さと、なによりそれを実現してしまう思い切りのよさには惚れ惚れするものがある。その芸術性について体系的に説明せよと言われたら、実は「わかりません」と言うしかないのだが、わからないもどかしさに身をゆだねるより、ワクワク感をキャッチすればそれでよいのではないか、というのが、体験的に学んだブラジルの現象の読み方だ。

たぶん、相手も理解力などは求めていない。正しい答えもない。「正しいひとつの答え」が好きな日本人には、少し頼りない思いがつきまとうのかも されないが、基準を「答え」よりは絶対的に「感性」に置いているブラジル人のほうが、どう見ても幸福な時間を すごしているように見える。そういう



ブラジルのカーニバルを紹介した『レビスタ・カルナバル・ブラジレイロ 2008』より。右はゴキブリを大胆に模したコスチューム

お得な「なんでもアリ」感に到達できなければ、かゆいところに手が届かないくすぐったさを楽しんでみるのもよいのではないかと思う。
80分1回限りのパレードに捧げる驚くべき集中力と勤勉さ

ブラジルの特徴にカーニバルを持ち出すのは、いまさら言う方も聞く方もうんざりではあるが、ブラジルすなわちカーニバルと思われているわりには、イメージが誤解と偏見に満ちていて、いつまでたっても改善されないので少し説明したい。

誰が言い出したことなのか、「3日3晩踊り続ける」とまことしやかに言われているのはとても不思議だ。パワフルなブラジルといえども3日3晩踊れる人間など存在しない。肌の露出度の高い女性がプリプリ踊る乱痴騒ぎだと思われるのも、あり得ないものへの期待だけが先走っていて感じがよくない。そのような一面がカーニバルにも国民性にもあることは確かながら、パレードがどのように成立しているかの奥深さや、それに賭ける人々の情熱に目を向けたら、ブラジル文化のありようの片鱗が見えると思う。そういう意味で、やはりいまさらながらブラジ

ルはカーニバルなのだ。

一言断っておくと、ブラジル国民が一齐に踊り狂っているわけではない。夏まつ盛りのその時期、バカンスとしてビーチで過ごしたり、旅行へ行くという人たちのほうが一般的だ。その方がむしろ文化的だと思われるフシすらあることも付け加えておきたい。

カーニバルはリオのサンバが世界的に有名だが、ブラジル国内では、全国各地、その特色を生かした独自の趣向で盛り上がる。リオやサンパウロは、12、14のサンバチームがそれぞれテーマを決め、仮装パレードする。そのパフォーマンス性を得点で争う。審査は専門家が厳正に行なう。ひとつのチームの出場者が約4000人、一晚に約3万人が出演し、観客7万人を動員する。「踊る阿呆に見る阿呆」で人員には事欠かない。

各チームのテーマは自由だが、曲作りや山車の製作、衣装のデザイン等、4000人のパレードを演出するには、テーマに沿って歴史や自然現象、社会問題など幅広い知識の背景がなければ



街はアートにあふれている。サンパウロにて

写真提供：渡邊直樹（32ページ目）

ならない。哲学があり機知に富み、イテリジエンスを匂わせ、美的センスを損なわない程度に滑稽で陳腐という雰囲気のパレードいっぱいにはちりばめられる。

2008年のパレードには、40メートルを滑り降りる本当のスキーを実現した山車、うごめくゴキブリやクモの



ブラジルに現存するアフロ文化。サンバの原型になったリズムや歌の形態に、新たな注目が集まる

(仮装の) 大群、血がしたたる胎児を前面に配した山車などが登場し、人々をあっと言わせた。作る側は、これでもかこれでもかの離れ業を仕掛けてくる。その創造力は並大抵でない。こめかみに血がにじむような努力で作りのあげ、本番は80分1回限り。終わったら山車も衣装も曲もすべてが廃棄処分となり、

翌年に向けてすべてを新しく準備し直す。これを毎年繰り返す。この集中力と勤勉さ、やればできる底力がなぜ経済に生かされないのか疑問に思うところだが、それを差し置いてこんなことに心血を注いでしまう勇氣は、他にマネのできることはない。称えるべきポイントだと思う。

カーニバルのスピリットは遊び心の限界への挑戦

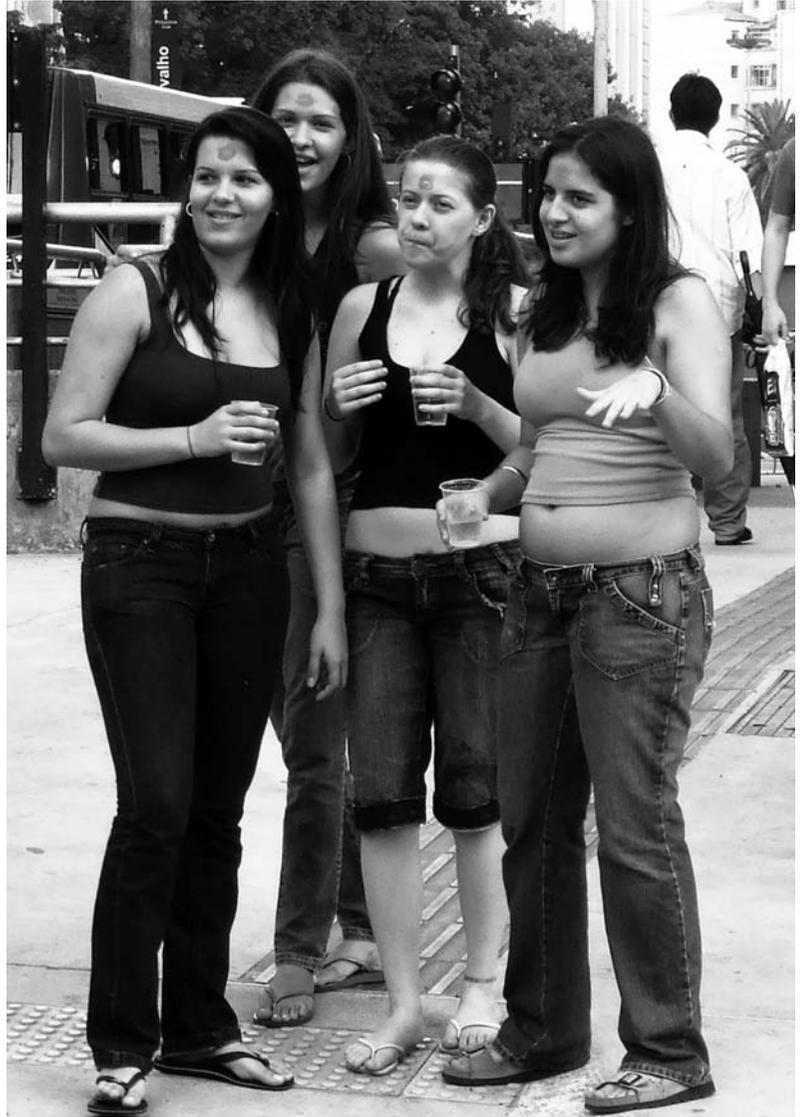
今年には日本移民100周年でもあり、リオでもサンパウロでも日系をテーマにしたチームがあった。モチーフは日本だが、デザインされた山車や衣装、テーマ曲などは、日本人には到底思いつかない仰天ものの傑作が並んだ。茶の湯、書道、はては「デカセギ」がサンバの世界でどう花開くかに人々は期待を寄せた。バカ殿ふう巨人形や白塗りのお婆芸者軍団。取材にきた日本の週刊誌は「日本の文化が曲解されている、そんな日本文化はありません」と、残念ながら「バカ騒動」扱いで報道した。

これはブラジル側が一本取ったと思う。カーニバルのスピリットはあくまでも空想の世界を広げ、どこまで面白くできるかを勝負にしているのだから

で、これで日本文化を伝えようなどとは誰も思っていない。ひたむきに遊び心の限界に挑戦しているだけだ。これが堅苦しい文化論では語り得ないブラジル文化を形成している要素であり、そんなところにブラジル文化の理解の難しさもひそんでいるような気がする。

サンバは歴史の浅いブラジルにおいて、数少ない固有の文化だ。ただ、それが国内で本当に文化として扱われているかという点、中流階級から上の階級の視線は意外に冷たい。黒人たちの、あるいは下層階級のバカ騒ぎ程度にしか見ていない一面がある。国立歴史美術遺産保護院が国家遺産として登録したのはつい昨年のことだ。ブラジル生まれの火酒「ピンガ」は労働階級の飲み物、アル中のもととして蔑まれ、地位も低かったが、それが「ブラジルの特産品である」と認識を改め、「カシヤッサ」という呼び名で、国家の誇りとして魅りつつある経歴と似ている。

最近では、ヒップホップを愛好する若い世代が、サンバをはじめとするブラジル特有のリズムに注目し、新しい音楽に伝統的要素を取り入れることにカッコ良さを見いだすという現象が起きている。エネルギーでオリジナ



南米最大のビジネス街、サンパウロのアベニダ・パウリスタにて。思い思いのスタイルで、自分のファッションを楽しむ

リテイの高い音楽シーンを生み出す。努力というイノセントな言葉を寄せ付けない強力な才能を感じるどころだ。お腹ぼこりのヘソ出しも自分らしさに変えて闊歩する

国土の広さに合わせてあらゆる価値観が存在していることを思うと、語るネタはいくらでもあるはずなのに、語

ってしまおうとウソになり、言葉を尽くすと、なぜか真実はスルリと姿を消して、霞のようにつかみどころがない。どこに落とし穴がひそんでいるか不安でならない。

この国に流行というものが、あるのかないのか、一世を風靡するという土壌がないところで見つけた傾向は、結

局「なんとなくそんな感じ」でモヤモヤしてまとまらない。まとまらない理由は、個々人がそれぞれはつきりした主張を持っていて、各々がてんでばらばらの思考と嗜好を持っているからだ。だが、互いにその存在を認め合っている。本拠地のようなものがない。人に迷惑をかけない限り、どんな風変わりでも、居場所も主張も許されるのがいい。日本の若者のような「別に」で終わってしまう、「なんでもいい」の消極性ではなく、「なんでもいい」の積極性だ。

サンパウロで流行っている女性のヘソ出しファッション。「ヘソ出しはいいけどさあ、お腹がぼっこりジーンズからはみだしているのは醜いからやめてほしいよね」。ブラジル生活に日の浅い日本人は露骨に嫌な顔をする。瘦身文化に浸っている日本人にとって衝撃なのは確かだが、醜いと思うかどうかは誰が決めることでもない、個人の自由だ。そういうことで、お腹ぼこりの女性たちが町を闊歩する。都会では若者たちを中心にファストフード化が進み、体形は肥満傾向にあるし、そもそも臨月の妊婦でさえもお腹を丸出しにして平気のふうなので、ヘソ出しというよ

『Tropa de Elite (ジ・エリート・スクワッド)』でベルリン国際映画祭の金熊賞を受賞したジョゼ・パジーリヤ監督と主演女優のマリア・リベイロ

写真提供：AFP=時事

りは腹出しというスタイルは、公共の場で普通の風景になってきた。ちょっとした域を越えた相当な脂肪を抱えていても、女性たちは自分らしさという魅力にすりかえ、自信満々だ。

ファッションと言えば、年に2度行なわれるサンパウロ・ファッションウィークは、ミラノ、ニューヨーク、パリなどに続き世界から注目されるニューヨーク発信イベントになった。色づかいのユニークさや、自由な発想でデザインされた洋服や小物は、今いろいろなブランド名で日本にも上陸している。この大胆にファッション界をゆさぶる作品の背景には、腹出し女性たちに見られる禁忌のないたくましい自己主張があり、それが新しいファッションを生む大きな支えになっているのではあるまいか。

町行く人々の出で立ちには実に気ままだ。スカート丈は自由に上下し、あらゆる時代の流行が登場するし、夏でもタンクトップにマフラー、冬でも毛糸の帽子にビーチサンダル。組み合わせにも制約がない。とにかくもつともらしく「わたしこそがファッション」という自信に貫かれており、お腹ぼっこりを醜いなどと言っているレベルでは、

無頓着な時代遅れなのか最新ファッションの応用なのか、区別もつかない。そんな環境から生まれるファッションモデルは、サツカー選手に並ぶブラジルの「特産品」となり、重要な輸出品と言われ、大躍進を遂げている。ベルリン映画祭で金熊賞を受賞したブラジル映画

先ごろ第58回ベルリン映画祭でブラジル映画『Tropa de Elite (ジ・エリート・スクワッド)』(ジョゼ・パジーリヤ監督が金熊賞を取った。警察と貧民窟の麻薬組織との癒着と抗争、警察のエリート特殊部隊の情け容赦ない拷問、麻薬売買で資金を供給している中上流階級の大学生たち、それぞれの立場が抱えている根深く暗い問題を、善良な市民が持つている疑いの目を満足させる形であらさまに描いた。フィクションではあるが、ブラジルの恥部ともいえる現実をさらけ出し、見て見ぬふりのすまし顔で生きる中流階級の罪深い欺瞞をえぐり出したことで物議をかもした。

ちょうど10年前の第48回ベルリン映画祭で金熊賞を取った『セントラル・ステーション』、2002年カンヌ国際映画祭で話題をまいた『シティ・オブ・ゴッド』等、若手監督によるこの

手の恥部系話題作が、ここ10年の大きな潮流になっている。経済政策で足元をざっくりさらわれ、制作から配給まで壊滅的狀態を長く続けたブラジル映画界が、ここまで息を吹き返した原動力は、深く病んだ社会構造だったと言えるだろう。しかしながら、その社会批判には、サンバを踊る歓喜のような健康な心がのぞき、大きな救いがある。そのあたりはトロピカルな国の楽観性が与える味わいかもしれない。

話題作となる作品の多くが、ブラジル人をして「ブラジルってそうだったの!？」と言わしめる特殊事情を題材に



この4月5日から日本全国で順次公開されるドキュメンタリー映画『ファヴェーラの丘』(監督・ジェフ・ジンバリスト&マット・モチャリー)。リオデジャネイロのスラム街で、元麻薬密売人の男が子どもたちと音楽やダンスに希望のリズムを響かせる 写真提供：ナウ オンメディア



サンパウロのボン・レチーロにある韓国レストランでもスシはメニューに入っている

取っているという点で、国際性があるとは思えないが、この極端なわかりにくさと、大胆なわかりやすさのダイナミズム、奔放ゆえに、読み違えとすべてが裏返ってしまうかもしれない危うい勢い、そんなところが魅力になっている気がする。

サンパウロに、大衆映画を上映しない、通ウケ映画専門の映画館がある。館長は繊細にして気難しい評論家で、難解な映画をさらに深読みする。日本映画への関心も強く、日本情緒を特殊な嗅覚で察知するプロだ。この館長に、日本の映画ですばらしいと思う一本は何かとたずねたときに『男はつらいよ』だと言われてびっくりしたことがある。ある意味、あれは日本らしさの象徴かもしれないと思ったり、他国の文化を読むというのはそれほど簡単ではないのかもと思ったり。

太巻きの具にマンゴーやイチゴはすでに和食の許容範囲に

サンパウロは移民都市で、たくさんの文化が混在している。異文化との接触が多い環境が、「違うもの、知らないもの」に対して拒絶をしない免疫力と吸収力を培った。知性的な建前としては、互いの文化を尊重し、一方で融

合もとげている町ということになっていく。しかし、無邪気な好奇心が先に立ち、あまりにも簡単に取り入れてしまいうことで軽薄さを露わにしていることもある。

漢字の流行はいいが、生半可な知識で刺青してしまうのは、見ていて痛ましい。「生」—— 生身の体だけにナマ？ 人生とか生命のつもりなことはやわかる。「銭」—— あからさまなのは字のニュアンスをわかっているからだろう。「平」—— 平和の平だが、これではタイラだ。「黒子」—— 何の意図なのか、字体もゆがんでたしかにホクロのようではあった。文化にまで成熟させていない、漢字の持つ文化的背景を無視した果敢な行為と言えよう。

恐れを抱かないという意味では、自分も似たようなことをしているので大きなことは言えない。サンバはフェイジョン（煮た豆。ブラジル食を代表する、ご飯に対して味噌汁のような存在）を食べる生活から生まれたものであり、フェイジョンがあつてこそブラジルのサンバなのだと思うが、自分は味噌汁の生活から抜け出られないまま打楽器を練習している。だからまったく上手くない。

日本食ブームでスシの人氣が高まって久しい。「スシなんか作るの簡単さ。飯に酔入れて生の魚をのせりやできあがりさ」というブラジル人の発言に、どう訂正を入れたらいいのかわからず、もどかしい思いをしながら、しかたなく日本食もどきをご馳走になる。そんなことがあちこちで起こっているのだと思う。

ブラジルで日本食はオリジナル化が進んでいる。これも最初は許し難いもののように思われたが、時間を経るとそれなりの熟成をみるもので、太巻きの具にマンゴーやイチゴは許容範囲になった。もっともつと奇抜なものが登場し、ブラジルの和食として日本に輸出する日がくるかもしれないとも言われる。

カーニバルにおける日本移民テーマは、日伯間の友好をうたったものの、現実にはむしろ相互理解の浅さが露見し、厚い壁、深い溝、遠い距離が浮き彫りにされた。しかし、この関係もブラジル人の手にかかって、突拍子もないパワフルな作品へと胎動を始めている。本来簡単には理解できない文化というものを、超感覚でとびついたり、勢いよく変質させたりする力そのものがブラジル人の文化と言えるのかもしれない。